

『東京の三十年』

柳田 國男

『東京の三十年』

竜土会と田山君との関係は、蒲原有明さんが私より詳しく知っておられるはずである。私の記憶では、番町の英国大使館の後の小さな通りに、近頃ははじめた西洋料理屋が静かでうまいものを食わせ、おまけにおやじが文学ずきだから、あそこで会をしようじやないかと、蒲原君がいうから一しよに行こうと、田山君が来て勧めたのが始めだったように思う。この料理屋が後に麻布へ進出して竜土軒となり、それからもずっと続いた無名の小集が、

誰がきめるともなく竜土会と呼ばれ、そうして有名になったのである。文士も過敏だから問題にしたかもしれぬが、どうもあの新店の主夫婦が、店の広告に利用したらしい形跡もすこしある。

こういう文士の会合に私がたった一人、ぽつんとまじっていたのにはわけがあった。最近に正宗白鳥君の文章によって思い出したのだが、この番町の何とか亭の会合が始まると同時に、それまで一年以上も続けていた牛込加賀町の、私の家の小さな会が消滅している。こちらは素人の家だから、せいぜい六、七人しか集まらず、酒も

食べ物もあつたりなかつたりである。ちようどいいうちが見つかつたから、あすこにしていま少し連中をふやそうじやないかという相談がきまり、ついでには私を袖にする事ができなかつたのだらうと思う。しかしそういふいきさつももう一向におぼえていない。

私の家の会というのは、それほどの趣意もなく、最初は田山が友だちをひっぱつてきて、また来月も寄つてみようじやないかという程度だつたと思うが、眉山、風葉の二君はつい近所だし、島崎、国木田などという人も折々は来るのだから、互いちがいになるよりも、日を期した

方がおもしろかろうというくらいの趣旨はあったかもしれない。そうなるも他に少しずつ新しい顔ぶれも加わってくる。私の方でも少壮知識人、ことに学校仲間の誰彼を引き合せてみたいという考えはあったが、この方は珍らしがって一ぺんは来るだけで二度目からはみな引き下ってしまい、文士の側でも新規に常連に加わったのは蒲原君ぐらいなもので、あの新会場を発見しまた紹介した武林無想庵君も、また生田葵山君も、私の家の会には来ずじまつたように思う。

別に田山のためという計画はなくても、自然に彼を中

心とした会にはなっていたろう。彼は萩坪翁の門下で、歌の会では私の祖母や姉を識しっており、父や母も折々逢いまた噂をして、つまりはただ一人、この家の友だちであつた。ことに母はあの当時、なるたけ私に外を飲みまわらせまいという下心があつて、家の客を悦よろこびまた歡待したから、居心地は悪くなかつたのだらう。今から憶うとなつかしいのは、小さな庭ながら芝生があり躑つっじ躑が咲き、大きな楓の樹が二、三本もあつて、初夏の頃などは暮色がよかつた。たいした佳い話などがあつた氣づかいはないが、旅行や読書の記憶というようなのが豊富

で、今いうゴシップのごとき後味のいやなものに、時を費していかなかったことだけは私が受け合ってよい。ほんとうにいい会だねと顔を見合って、少々得意になっただのもわれわれの若さであった。

そのころ田山君はよくアルフォンス・ドオデを読み、読むと持ってきてみな私に貸してくれた。たいていの英訳本はみなこのごろのようなザラ紙の臭い本だったが、その中でたった二、三種、体裁をすっかり原書の上製本のとおりにして、画ももとのままのを入れたものがあった。『風車小屋からの手紙』もその一つだが、『巴里の

三十年』というのが特に心を動かしたのは、日頃ありがたがっていたツルゲニエフとの会談記がその中にあり、また未刊に終わった流され王の物語のことが、出ていたからでもあった。私はこの本を撫摩しつつ田山君に向って、君もやがてこういうふうな東京の三十年を書くといいねといった。そうした後に果たして『東京の三十年』というのを書いて出したのだから、私は彼が若い日の志を失わぬ人だと思ったのである。小僧になって京橋へ来たいた時からかぞえても、このごろはまだやっとな二十年目ぐらいであった。

彼の自然主義なるものに対しては、自分はむしろ同情の足らぬ批評家であった。ちようどあの前後、私は役所で特赦の上奏案というものをこしらえる役を命じられ、月に何十件というあわれな犯罪事件の書類を見ていたのだが、そういう中でもとりわけ心を打たれたものを、よく覚えていては彼に話し、それが作品となって現われたのもいくつかある。もちろん注意深くそれを読んでみるが、この誠実なる「作前読者」とも名づくべき私に、なんと腑に落ちない補充や変更が少しずつあることは、いつも不満の種であったけれども、それをいうことはで

きなかつた。たまたま何かの拍子に私のことを、モデルにしたにちがいないと思う作品があつたのをとつこにとつて、写実写実と君は言うけれども、真相を得ていないじゃないか、というようなことを論じてみたことがある。今ならかような突詰めたことは、いくら親友にでもあえてしなかつたらうか、私は元来ほどあいを知らぬ男だつたと思われる。これに対して田山君は、こまるというよりもむしろ憤つた。そういうふうにはしか見えなかつたのだからしかたがない。つまりは僕がまだまずいということを、君は遠まわしに言おうとするのだともいうので、

こいつはいけないと思つて忠告は撤回してしまつたが、今でも私は正直なところ、彼の態度が悪かつたとは思つていない。いわば感覚の錬磨が足りなかつたのである。それを時代の風とは言いながら、酒や冶遊やゆうの間に苦悶を紛らそうとさせて、いよいよ荒々しくしたことはどう考へても惜しい。都市の文化などというものは、ただうまい物を食わせるぐらいの能しかなくて、三十年をかけてもまだこの田舎出の文士から、あくを抜くだけの力がなかつたのである。そういう状態が、今だつて続いておらぬとは言えない。

おかげで私なんかも、のうのうとこの都で老いることができたのだが、岩野泡鳴君を始めとし、幾人とも知れない田舎出の素朴文人は、実にいい気になって、腹一ぱいの太平楽を吹いていたのである。上田柳村とか平田禿木とかいう類のいわゆる都雅の士が、避けて近よらず蔭でにやりとしていた気持は、私だけはおおよそ理解していた。国木田独歩なども常には江戸前文人の柔弱を軽蔑しながら、やはりこの気持だけはよくわかったと見えて、田山君に対してはそう神経を傷けるようなことを言わなかったが、露骨でしかも人の好い泡鳴等には、毎度実に

皮肉なひやかしを浴せかけていた。それがなんだか町の粹人たちの、代言のようにも私には感じられたのである。

川上眉山君は本郷の商家の生れで、純東京人の長処弱点を共に備えたような人だったが、この人だけは求むるところが多かったからか、いやな顔もせずによく田舎者どつきあった。そうしてちつとも年長者ぶらず、人なつくく聴いたり打ち明けたりする様子が、まことに人柄なゆかしい人のように思われ、今に好い印象を留めている。それがどういいうわけであったか、私の方へは毎回出て来たのが、いわゆる竜土会への切りかえを境に、ふつつり

と顔を見せなくなつたように思う。そうしてたしか一年あまりのうちに、あの凄惨なる自決をしたのである。

小山内薫君はあの時分まだほんとうの新進であつて、あらい木綿がすりの羽織を着ていた。この人は眉山とは入れちがいに、武林の友人として竜土会の方へ出席しはじめた。腹は江戸っ子過ぎるくらいだったかも知れぬが、私にはなんだかソ国からこのごろ出て来ましたというふうに見えて、いろいろ話をさせて聴くのが楽しみであつた。ところがあるとき食事のなかばで、小島という同席の青年が、おそろしく烈しい見幕で彼を痛罵したことが

ある。小山内は黙って蒼い顔をして一言も返答をしなかった。それがなんだか気の毒でたまらぬので、私は奮然として一人立って抗議をし、うんと小島をやっつけたつもりだったのだが、帰りに田山君が二人きりになってから私にささやいた。あれは女の事なんだよ。くわしく話を聴いたら、君なんかの同情のできる事件じゃないんだよといった。後々作品その他からそれも少しずつわかってきたのだが、そんなことなどはこの問題じゃない。私はあの無口な純情家の田山君が、これでも私よりは浮世のさまざまには通じている。さすがは小説家だなとひ

そかに敬意を表したのであった。この以外にも、聴くのがいやだと思ふような内側のもつれが、こういう仲間はいくつかあつて、酒を飲むものだからそれが時折は一端をこの集まりに^{あら}顕わした。聴けばすっかり知りたいうな気持ちが私にもあり、そんなことをしている余裕もないので、自然に私はこの有名な会合から、疏遠になることを制し得られなかつた。素人の友だちなどというものは、根っからたよりにならぬものだということ、田山も国木田もおそらくは経験したであらうと思う。

日本文学電子図書館

『東京の三十年』

著 者：柳田國男

制作者：宮澤一郎

底 本：「現代日本思想大系29 柳田国男」
筑摩書房

1965年 7月20日 初版第 1刷発行

1973年11月20日 初版第12刷発行

日本文学電子図書館